



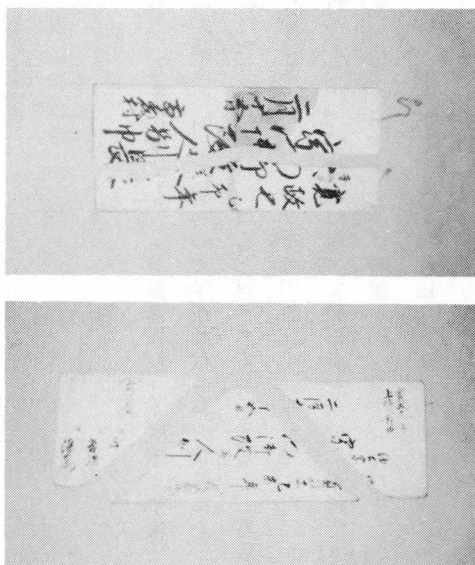
# 断截史料の復原補修

— 高島藩宗門帳について —

原 島 陽 一

一、

史料館が昭和三〇年度に購入した「高島藩領村々宗門改人別帳」<sup>(1)</sup>は、同一領下の宗門帳だけの史料群という内容上の特色とは別に、購入の時点で史料の大半が断截された状態にあったという極めて特異な史料である。断截といっても、一般の方には容易に想像しかねると思うので説明すると、高島藩の宗門帳は近世を通じて冊子型の横長帳簿なのであるが、これを一カ所ないし四カ所で切断して一冊を二片ないし五片に分断してあるということである。表現が拙劣なので、史料がどのような状態になっているかを十分に納得できない方もあろうし、あるいは「まさか」と思われる方もあるかもしれないが、次ページの第1図を見ていただきたい。まさしくこのように、もとは約四千冊ほどの史料が断截されていたのである。断截の理由などについては、後に触れることにするが、このままでは整理をすることも困難であるし、まして閲覧利用に供することもできないから、利用可能な状態に修復することが永年の懸案事項で



第1図 断截された史料

- 上図は横長帳簿をタテにまっ二つに切断してある。
- 下図は3片に分割されているが、恐らく中央部で二つ折にした状態で斜めに切断したものであろう。
- 切断の方法は雑多であって、規格性はない。切断形態のうちの数例をP.168に図示したので参照されたい。

あった。裏打ちなどの技法によって復原することは誰しもが思いつくが、老大な量を前にしてはそれに要する経費と労力との解決策が見出せず、入手した後も長く放置されていた。しかし、そのままでは死蔵になりかねないと思っていたところ、十数年以前に偶然、この史料に関する特殊な事情を知って、復原の途を模索し始め、次第に具体的な作業工程や技術的な復原方法について解決の糸口がみえてきた。昭和五九年度からは概算要求にも挙げてきたところ、昭和六二年一二月に、年度途中における追加配分として復原費の支給を受け、断截史料の一部を補修復原することができた。<sup>(3)</sup>この機会に、この史料群の入手経緯や史料の概容、及び復原の実現に到る経過と復原作業の工程などについて報告を試みるものである。

「高島藩領村々宗門改人別帳」（史料館では収集史料を出所の家別によって区分し、家文書を単位にしている原則に従い、以下、本稿ではこの史料群を本文書と呼ぶことにする）は右のように特異な形態をもった史料群であるが、それが史料館に収蔵されるに至った事情も、他の文書とは違っていたようである。契機になったと思われるタイプ印刷の一文を紹介しよう。<sup>④</sup>（用字や句読点など原文のまま転載した）

昭和三十一年 月 日

殿

高島藩「宗門御改並人別帳」について

明治初年高島藩の払下げに係る寛文以降二百年間に亘る「宗門御改並人別帳」が長野県諏訪郡に於てのみ而も今日まで、大半が水火亡失の難を免がれ保存せられてきたということは、社会史研究の上から重要な意味をもち、学界にとって極めて喜ぶべきことであり、まことに他に類例をみない奇蹟でさへあるといへます。

反面この文化的遺産を継承し、保存してきた関係者の払った幾多の犠牲は筆舌に尽し難く、殊に関係父子二代

に亘りこの整理事業に献身し、これを完成させた事実のもつ意義は、その動機が封建性への反抗意識から出発したとはいへ庶民のもつ力の偉大さを物語るものとして高く評価されなければいけないと存じます。

この宗門帳のもつ意義とその価値については既に学界から十分に認められてきたところであり、また一部学究の基本史料としてその学問的業績に供せられたことも周知の事実であります。

然るところ最近に至り該宗門帳の保存維持が現所蔵者の都合により、困難の事情に立至りその間地方関係者間に於てこれの継承保存について種々協議したのでありますが、現下の諸事情は到底地方に於ては遺憾ながら保存不可能であるとの結論に達したのであります。

茲に於て小局は関係者の一人として責任を以て所蔵者の意志を酌んで

一、個人所有による水火亡失の危険を極力避け

二、出来るだけ公的機関による整理、保存、継承の道を講じ

三、その機関を通し学界に解放、自由研究に供すること等々

積極的に保存促進の運動を推進することに決定したのであります。

右様事情に関し幸大方の御理解と御支援により、該宗門帳一括が現所有者の手から最も意義ある機関に継承、保存が出来る最良の方途が見出されるならば関係者の喜びは申すまでもなく学界に貢献するところが大きいと存じます。

これの譲渡、移管についての具体的条件その他に関しては、何卒左記宛御連絡賜り度偏に御協力の程をお願い申し上げます。

尚、「宗門帳」の概略は別紙の通りにて不明の点も多いかと存じますが御照会次第御返事申し上げます。

以上

連らく先 長野県諏訪市浜町 文化書局

百瀬 たけし

(筆者注)以下、別紙。原文では上下二段組)

「宗門御改並人別帳」の保存経過

一、天保、<sup>(弘)</sup>改化の頃諏訪郡永明村(現茅野町)横内の人、小川津右衛門当時同地方で行はれたるネコ捲り(一種の差別待遇)により発憤藩庫に秘蔵さる宗門帳により身分を明らかにする悲願を以て当時の宗門奉行高山善右衛門屋敷に奉公す。(万延前後)

二、高山奉行、津右エ門の野望を見抜きたるもその悲願と熱意に動かされ死を<sup>(題)</sup>睹して彼に藩庫の宗門帳を密かに貸出す。

三、津右エ門、家族、親戚を動員して寛文以降約二百年間に亘る横内村宗門帳全部の書写しを約二ヶ年間を費し完了す。(元治元年前後)

四、この書写し完成によって津右エ門は「ネコ捲り」を拒否する根拠を得て村役人からの庄迫、差別待遇を打破し、同様立場にありし農民の自覚を喚起す。史料に基き身分の開放を獲得した歴史的意義は尊し。

五、明治四年十月宗門人別帳御改めは廃止され、同年十一月廃藩置県同五年高島城破却

六、藩庫の宗門帳を紙屑として払下げ競売に附す。津右エ門、払下げ価格の法外に割高なるにも不拘、ばく大な犠牲を払いこれを一括買受く。(価格は当時に於て米二十俵取りの田地に相当する約二百円位なりし由)

七、この日破却奉行中島坦左エ門、宗門蔵より搬出せる帳面を十数台の押切にて、三切、或は三角に切断す。

(帳面はスゴ俵に詰め、馬にひかせて十数駄なりしといはれる)

八、寛文五年だけの分は中島奉行、郡下三沢村の中島奥五郎よりの借金の代償に同氏に払下げ同氏の家族所有して今日に至る。但し若干は津右エ門の買受のものに混入す。

九、文化、文政以降は生存者ある関係上切断せず。本帳のままなるも津右エ門に引渡されたるものの外は何れかに散佚した模様なり。

十、津右エ門、宗門帳入手後苦心惨たんたる整理を開始す。

明治三十年頃略々完成したるものの如く、整理されたるものは一村宛、小さな村は一括、大きな村は二括或は三括、藁縄を以て堅く束ねて保存せり。

十一、津右エ門、明治三十三年十一月五日八十三才を以て死去。

次男三四郎相統。当初相当の蓄財ありたるも製糸事業に失敗、家計極度に逼迫したるも宗門帳整理は孜々として尚之を止めず。然し堪へ難き際は涙をのんで宗門帳の一部を売却して生計にあつ。ために若干の散失を余儀なくさる。

十二、宗門帳と終始したる三四郎、大正十一年七月二十一日六十二才を以て死去。宗門帳のうち横内村の本帳のみ兄、坂三郎氏の所有するところとなり、津右エ門の写したるものは三四郎の所有なりしも既に他に譲渡した若干村のものを除き残りの宗門帳全部は同氏の歿後事情ありて同村五味栄氏の所有に歸したり。以来宗門帳は今日に至るまで五味氏方は厳重保管せらる。

十三、所蔵者五味栄氏その間希望者あらば宗門帳を筆写して耕料を収入の一部に加へ、或はまた若干の村の宗門

帳を一村一万円より一万五千円位にて売却して生計の資にあてたることあり。引渡しの際は可能なる限り副本（写本）を残すを例とし、分譲先、村名等総て記録を残す。

十四、現東北大学中川善之助教授、昭和八年―十年に亘り該宗門帳を史料として「末子相統の研究」を發表。當時五味栄氏、中川教授より宗門帳一括をばく大なる価格にて斡旋したき旨徳憑を受けたるも、郷土に保存する意味にてこの申出を断られたる事情にあり。

以上

#### 「宗門御改並人別帳」内容概略

#### 一、年代

寛文十一年（寛文五年若干混ズ）―明治

寛文、延宝、天和、貞享、元禄、宝永、正徳、享保、元文、寛保、延享、寛延、宝暦、明和、安永、天明、寛政、享和、文化、文政―明治

#### 一、範圍

信濃国高島領郷村（凡百数十ヶ村）

#### 1、信濃国諏訪郡

矢ヶ崎村、埴原田村、北大塩村、下桑原村、神戸村、湯川村、芹ヶ沢村、南大塩村、中村、古田村、福沢村、粟沢村、上原村、上蔦木村、瀬沢村、木ノ間村、平岡村、神代村、田端村、高森村、池袋村、円見村、先達村、机村、御射山神戸村、金沢村、茅野村、安国寺村、神宮寺村、大能村、真志野村、小坂村、橋原村、鮎



沢村、駒沢村、新倉村、小口村、今井村、西堀村、東堀村、東山田村、下ノ原村、友ノ町、富部村、文出村、田部村、上金子村、下金子村、新井村、横内村、飯島村、赤沼村、福島村、西山田村、青柳村、田沢村、鰻原村、新井村、高部村、窪村外。

2、諏訪郡新田

立沢新田、ハツ手新田、中新田、柏木新田、芋之木新田、山田新田、上野新田、坂室新田、笹原新田、中道新田、須栗新田、菖蒲沢新田、大平新田、花場新田、瀬沢新田、小和田新田、穴山新田、槻之木新田、上場沢新田、大日影新田、栗生新田、柳沢新田、船久保新田、烏帽子新田、小屋場新田、木船新田、一本木新田、丸山新田、萩倉新田、板沢新田、二久保新田、新井新田、糸萱新田、金山新田、松目新田、大池新田、御作田新田、室内新田、白出新田外。

3、信濃国筑摩郡

中挾村、北能野井村、南能野井村、小池村、百瀬村、北内田村、南内田村、上赤木村、下赤木村、白姫村、神田村、和泉村。

一、保存の状態

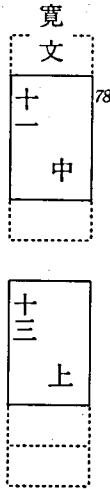
茶箱 拾七箱 夫々村別に整理し茶箱に収め一箱一箱に内容を表記す。

一、索引五丁

村別、年代順、保存の状態を明らかにするため索引を作成しあり宗門帳は払下げに際し三切或は三角に切断され入手関係者の復原整理事業は多大の犠牲が払はれたがとに角長年月を費して略々完成して今日に至った。従って該索引には宗門帳復原の状態が年代順に判別出来るよう符号によって表示されている。

一、索引符号についての説明

例、立 沢 村



1, 長方形の枠印は本帳、写本二通ある意、即ち寛文十一年中、上は二通あり。

2, 枠内数字は年度、即ち寛文十一年の意。

3, 枠内中の字は本帳が三ツに切断(上、中、下)されたもの。

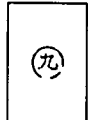


のうち上、下なく中部のみ現存の意。

4, 枠内上の字は切断された三ツのうち上部のみ現存の意。

5, 右肩数字78は参考戸数。

延宝



延宝九年上、中、下の三ツに切断されたものの中部と下部の末尾が少し不足。

貞享



○ 印は上、中、下完全なもの意、即ち貞享三年は完全揃。

文化



○ 印は完全なもの意、即ち文化四年は完全揃なり。

天保



○ 写本のみ保存の意、即ち天保十一年は写本のみあり。

(二十)

○ 印完全保存に近き意。

(三)

○ 印上中完全保存に近き意。

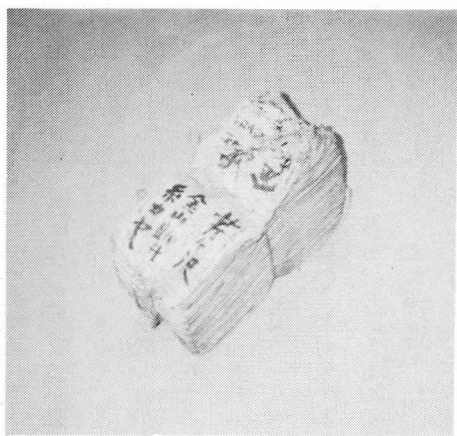
以上、ながながと引用したが、これは、いわば史料の譲渡宣伝である（以下これを譲渡広告と呼ぶことにする）。史料を譲渡するのにこのような方式を採る例が皆無とは思わないが、少なくとも史料館が所蔵する三百余件の文書のなかに同様の例はない。収集に至る事情を特異と称する所以である。この譲渡広告が作成された昭和三十一年ごろには、本文書を受入れて保存することができると史料保存利用機関の数は限られており、それがまたこうした広告を生む背景であったといえよう。だが、実際にはこの宣伝文は發送されることなく当初の機能を果たさずに終わっている<sup>(5)</sup>。もし予定通り全国に配付されたらどのような反応を示したか興味をひくところだが、未發送では反響の起りようもなかった。とはいえ、この譲渡広告が史料群を分散させずに一括して保存することを基本として起草されたことは注目してよからう。地元での保存を第一義に考えて、しかも一括入手の代償の目的がつかなければ、所縁の村などへの分割譲渡もあり得たと思うが、むしろその危険を避けようとした方針が明白であって、史料保存にとってもこの譲渡広告は重要な意味をもっている。なお、史料館側の記録によれば、本文書の購入先は譲渡広告の広告主である百瀬氏でなく、二代目の所有者として名前が挙っている五味氏になっている。荷物も茅野市の五味氏宅から發送している<sup>(6)</sup>ので、百瀬氏はあくまでも仲介役であって商品として仕入れたものではなかった。

かくて、本文書は史料館に収集されるに至ったが、始めにその概要を明らかにしておこう。文書名に示すように、内容は高島藩領下各村の宗門改人別帳である<sup>(7)</sup>。八冊だけ別種の史料があるが、宗門改人別帳から特定の家の系譜を書き抜いたものであるから関連史料ということができ、異種史料の混入には当たらない<sup>(8)</sup>。このように、ほとんどが同一の表題をもっているが、個々の史料の成立または形態からみると、1 原形のまま残存したもの（以下、原形史料という）、2 原史料を断截してあるもの（以下、断截史料という）、3 原形史料または断截史料を筆写したもの（以下、筆写史料という）の三種に大別することができる。このことは、本文書の出所の確定にも影響する。本文書の本体は、領下

各村が提出した宗門改人別帳を高島藩庁で保管してきたもので構成されていることは明白であるが、部外へ譲渡されたもの故、単純に高島藩庁の記録として扱えないところへ、右の筆写史料が存在することによって本文書の性格が変ったことは決定的となる。従って、本文書の原出所は高島藩庁であるが、後に小川・五味両氏の所蔵を経て史料館に収集されたことを銘記すべきである。

1 原形史料 本文書の大半は断截されていると、これまで述べてきたが、実は少量ながら断截をまぬかれて原形を存している史料が残っていたのである。それらには地域(村)の特定性はないが、年代が化政期以後に集中しているという共通性があり、決して偶然に原形で残ったわけではなく、意識的に断截から除外されたものである。その理由として、譲渡広告の別紙「九」に「文化文政以降は生存者ある関係」を挙げているが、果たしてそれだけの理由であるかには疑問がある。断截の適否が、もし宗門改人別帳記載者の生没にあるとすれば、一般には死没者よりも生存者との関係が重視されるはずであり、死没者の分が断截されたのは別の理由によると考えられる。断截が一種の証拠湮滅であり、ことに後述の如き断截理由が存在するからには、断截の免除はその必要がみとめられない史料だったに違いない。生存者がいるという積極的な理由で残されたのではなく、断截の必要がないから除外されて消極的に残存したと解すべきであろう。ともかく、全部で一八四冊が原形のままに残存したのは誠に喜ばしいことである。

2 断截史料 断截史料は本稿の主要対象であるが、始めに移送時の状態ついて述べておく。一冊分が数片に切断された状態のまま各村別に仕分けられたものをほぼ年代順に積み重ねて二〇〜三〇センチメートル位の高さで束ねたものが一つの単位となっていた(第2図)。同一村の分が少なければ一束、多ければ二〜三束になり(譲渡広告の別紙「十」を参照)、各束の上部には村名と上下限の年代とを記した見出書が付してあった。この束を数個集めて約六〇センチメートル正方にまとめて荒縄で縛った状態で史料館に届いたと記憶している。譲渡広告の「内容概略」には、一



第2図 村別に束ねた断截史料

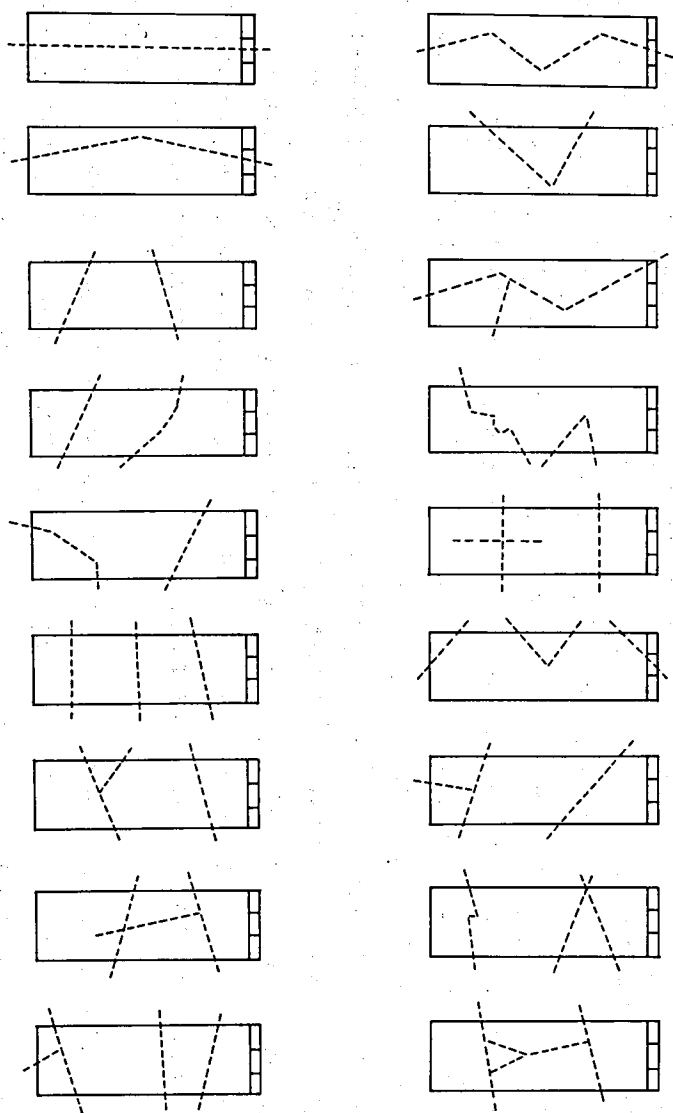
断截史料は村ごとにまとめ、残存量に応じて上図のような大きいものと、下図のような小さいものに束ねてあり、多いものは上図のような束が数個に達した。各束のなかは年代順に積み重ねてある。

七個の茶箱に収めてある旨が記されているが、整然と箱に入った史料という印象は薄い。あるいは移送時に箱から出したとも考えられる。すでに荒縄の結束は解かれているし、三〇年以上も経過したこと故、あるいは記憶が正確を欠いているかもしれないが、その点は了承されたい。次に、一冊ごとの断截の状態であるが、これには何の法則性もなく全く無秩序に切断されている。切り口が直角に揃っておらず、斜に押しつぶされたようなものがあり、譲渡広告の別紙「七」に記すように押切機を使って切断したことが肯定される。<sup>(12)</sup>一冊ずつでなく何冊かまとめて切ろうとして厚

さに無理を生じて刃がそれたために斜の断面になったのであろうか。短時間に処理しようとして押切機の手操作をミスしたとも考えられる。それは、分割方法が二分割から五分割まで、切断方向も縦・横・斜と多様であり、横長帳を二つ折りにしたまま切断したとみられるものがあることなどにも現われている。全く手当たり次第という感じであるが、切断方法の一部を図示すれば第3図のようである。これほどまでにして断載するに至った理由については次節で考えてみたい。

以上のように、史料館が入手した時には、第2図のようにほぼ村単位に仕分けられた状態になっていたが、譲渡広告に「押切りで切断したものをスゴ俵に詰めた」と表現されている拂下げ時のものを、どのような方法でここまで整理したのであろうか。拂下げは明治四年末か同五年初めと考えられるが、それから同三〇年頃までの約二五年間に大略完成させたと、譲渡広告は伝えている。スゴ俵詰の詳細な状況を明らかにする途はないので推定の域を出ないが全体を五千冊と仮定して平均三分割ならば一万五千に細分されたことになる。これがさらに一枚ずつになってしまったとすれば、一冊平均三〇丁として四五万枚になる計算だが、さすがにそこまではバラバラにならずにすんだと思われる。現存史料の切断面が揃っているものが多く、一枚ずつ積み重ねていった状態とは違ひ、各冊の編序を点検してみると（次節参照）多くが正確に配列してあるのもこれを裏づけと思う。もちろん部分的には一片ごとに分離したものもあったはずで、整理中に生じたものとの区別は不明ながら、断片をまとめて「屑」と明記した紙包みが本文書中に含まれている。それらの断片は除外して考えても、一冊分に再構成する照合の作業がいかに難事業であったかは改めて説明するまでもなからう。断載された各部の村名や年号が判明すると、その表紙部分に打ちつけ書きで墨書していきながら集積を重ねた形跡を見ながら、往時の困難と労苦を偲ぶばかりである。

3 筆写史料 これは、譲渡広告に明記されているように、前所有者の小川氏および五味氏が筆写したものであるが、



第3図 断截の諸形態 -----は切断を示す

その目的と筆写年代には大きな距りがある。第一は、幕末期に小川氏が写した横内村の分で、本文書が断載される発端ともいふべき史料である。この時の筆写は、宗門奉行高山の黙認を得て密かに小川家に持帰って家族らを動員して完成したという。現在、史料館が所蔵する横内村の筆写史料は四冊であるが、二種以上の筆跡が認められる。払下げ後にも小川氏が筆写したものがあつたというが、五味氏筆写の分との区別は明確でない。ただし、五味氏の筆写分（大正末年から昭和初年に及ぶ）には巻頭または巻尾にその旨を記している場合がある。筆写の理由として譲渡広告には部分的に売却した際の副本作成であつたとしている。後掲の残存史料村別一覧表に示したように、原形史料や断載史料が残っている村にも筆写史料を作成しているものが多く、売却が極めて部分的であつたようにもみえるが、同一村で多年次の筆写史料も残っており、断載史料の復原を完了した時点で全面的に検討すべきものと思う。筆写史料の年代が寛文から明治に及んでいることは、筆写に用いた原本が断載史料と原形史料の両方にわたつていることを示している。断載史料の場合は、後述するように原本の各部が完全に揃つていないとは限らないから、残存している断片部分をとびとびに写すことになり、利用は大幅に制限を受けるが已むを得ないであらう。<sup>13</sup>不完全な断載史料を筆写した史料を利用する時は、事前に断載史料の実態を十分に理解しておくことが不可欠である。筆写史料の利用には、もう一つ注意すべき点がある。それは、一冊分の原史料をそのまま筆写する通常の方法によらず、前後数年分の異動を一冊のなかに書込むという独自の形式を採っているからである。現在までに筆写史料として確認したものは七六冊に達するが、それは同数の原史料を写したことを意味しない。例えば、ある年の宗門帳の写しに、翌年の宗門帳との相違点、即ち増減の記事だけを書加えることによつて、一冊で二年分の筆写に代えているのである。宗門帳の記載が近接する年次においては、配列や人名に大きな変動がないことに着目して、筆写の時間と労力を節減しながら少しでも多くの記録を残そうと苦心した結果といえよう。とはいへ、連続していない多年次分を一冊に書込んだものなどは相



当に無理があつて、部分的には活用しきれない箇所もないとはいえないが、何の報酬も予測せずに文字通りの手作業で史料を筆写して残そうという熱意と努力は、断截史料の再編作業とともに、今後の利用者に無限の恩恵を与えるものであらう。筆写史料の冊数は七六四であるが、実質的な内容は数倍に値いするといえる。

ところで、本文書の総数量であるが、原形史料の一八四冊と筆写史料の七七二冊は確定とみてよいが、断截史料の数量は未確定であつて、復原作業が完了するまでは正確な数字を挙げることができない。それに、断截史料には、断截されながらも完全に復原できるものから、年号や村名も確定し得ない断片に至るまでの多様な形態があり、計算單位の設定の仕方大きく変動する要素をもっている。断截という特殊条件を有する史料であるから、一冊の半分以上が残っていれば一冊と数えてよいと思うし、欠損がそれ以上に及ぶものであつても村名や年号を確定し得てある程度のもとまりをもっていれば、それを単独の史料と認定することも許されるであらう。こうした視点に立つて、未開梱の分に既済の経験値を代入すると、全体で約四千五〇〇冊前後に達すると推定できる。このうち、部分的にもせよ一冊の形態に復原できる断截史料は約八〇〇冊であらうか。例えば三分割されたものなら、多少の欠損はあつても各分割部位の断片が残っていて、数丁分は原形に復し得るもののである。これに関する具体例については後掲の第二表を参照してほしい。約八〇〇冊以外の断截史料は、分割されたうちの一分割以上の分が一枚も残っていない不完全史料である。ただし、後述のように断截各部の照合の密度を高めることによって、不完全史料から一応の各部残存史料に変更できる可能性も否定できない。この意味でも全体量の推定は困難であるし、最終的な確定数を得るにはかなりの時間を要することにならう。

数量とともに、史料が残存した地域・村の分布状況の確認が必要であらう。そこで、高島藩領の各村（新田を含む）について史料の残存形態ごとの有無を一覧表にして第一表に掲げる。本来ならば、どの村の何年分の宗門帳が残って

第一表 史料残存形態の村別一覧表

村 名		原形 (L)	断截 (A)	筆写 (M)
(諏訪郡)				
鮎沢村	△			○
青柳村	△			
赤沼村	△	○	○	
穴山新田	△	○	○	○
新井村	△	○	○	○
上ノ新井村	*			○
新井新田	△	○	○	○
荒神新田	*	○		○
新倉村	△			○
有賀村		○		○
粟沢村	△	○	○	○
安国寺村	△	○	○	○
飯島村	△			
池袋村	△	○		○
板沢新田	△	○		○
一本木新田	△	○		○
糸萱新田	△	○	○	
今井村	△			○
鋳物師屋新田		○		○
上野新田	△			
上原村	△	○	○	○
後山新田		○		○
烏帽子新田	△		○	○
小井川村				
大池新田	△		○	○
大河原新田				
大久保新田		○		○
大熊村	△	○	○	○
大沢新田				○
大平新田	△		○	
大日影新田	△	○	○	
岡谷村				
荻山新田				
小口村	△			○
小坂村	△	○		○
乙事村		○		○
大和村				
角間新田				
柏木新田	△	○		○

柏原村		○	○	
金沢村	△			○
金山新田	△	○	○	
上赤田新田		○		
上金子村	△	○	○	
上桑原村		○	○	
上菅沢新田		○		○
上蔦木村	△	○	○	
神之原村	(*)	○		
上古田村		○		
川久保新田				
上場沢新田	△	○	○	
鯉原村	* △			
菊沢新田		○		○
北大塩村	△	○	○	○
北久保新田	(*)	○	○	○
北真志野村		○		○
木戸口新田		○		○
木船新田	△			○
葛久保村				○
櫛平新田		○		○
久保村	(*) △		○	
栗生新田	△		○	
神戸村	△	○	○	○
小川村		○		○
木ノ間村	△	○	○	
小梅沢新田				
小東村		○	○	
駒沢村	△			
小屋場新田	△	○	○	○
五郎右衛門新田	*			○
小六新田		○		
小和田新田	* △			
坂室新田	△			○
笹原新田	△			
塩沢村		○	○	
塩ノ目村		○	○	
神宮寺村	△	○	○	
志水新田	*		○	
下赤田新田		○		
下金子村	△	○		○
下河原新田				

下桑原村	△			
下管沢新田				○
下諏訪町	*	○	○	○
下葛木村				○
下之原村	△		○	○
下古田村		○		
下若宮新田				
菖蒲沢新田	△	○		
白井出新田	△	○		
神代村	△	○	○	
新町	*			○
須栗平新田	△	○	○	
瀬沢村	△		○	○
瀬沢新田	△	○		○
芹ヶ沢村	△	○	○	○
先達村	△	○	○	
先能村		○		○
惣右衛門新田	*			○
高木村				
高部村	(*) △	○	○	
高森村	△	○	○	
武居村	(*)			○
田沢村	(*) △	○	○	○
立沢村		○	○	
立沢新田	△			
田端村	△	○		○
田道新田				
田部村	△	○	○	
茅野村	△			○
塚原村				
槻木新田	△	○		○
机村	△	○		○
土波止新田				
円見山村	△			○
芋之木新田	△			○
友之町	△			○
樋橋	*			○
富部村	△		○	
中村	△	○	○	○
中新田	△	○	○	
中金子村		○		
中河原村		○		○

中込新田				
中沢村				
中道新田	△			○
二久保新田	△			○
西掘村	△			
西山田村	△	○		
子之神新田		○		
靱石新田				
埴原田村	△	○	○	
萩倉新田	△			○
橋原村				○
花岡村				○
花場新田	△	○	○	
拂沢新田		○		○
稗底村	*			
東堀村	△			○
東山田村	△		○	
平岡村	△			○
福沢村	△			○
福島村	△	○		○
船久保新田	△			○
(古田村)	上～下～△			
文出村	△	○	○	
古荒井新田	*			○
堀新田		○	○	
(真志野村)	北～南～△			
松目新田	△	○	○	
丸山新田	(*) △	○	○	○
御作田新田	△	○		
御射山神戸村	△		○	○
三沢村				○
南大塩村	△	○	○	
南真志野村		○		
宮田渡村	*	○		
宮原新田				
向河原新田				
室内新田	△	○	○	
餅屋	*			○
森新田				○
矢ヶ崎村	△	○	○	
休戸新田		○	○	
八ッ手新田	△	○	○	

柳沢新田	△	○		
山口新田		○		○
山田新田	△			
湯川村	△	○	○	
湯之町				
横内村	△		○	○
横吹新田		○	○	
若宮新田		○	○	○
(筑摩郡)				
赤木村	△	○	○	
和泉村	△	○	○	
神田村	△	○	○	○
北内田村	△	○	○	
北熊井村	△	○		
小池村	△	○	○	
白姫村	△	○	○	
中挟村	△	○		
南内田村	△	○	○	
南熊井村	△	○		
南百瀬村	*	○		
百瀬村	△			

1. 村名は、『旧高旧領取調帳』中部編（昭和52年，近藤出版社刊），譲渡広告，および残存史料から採録して，50音順に配列した。その際，誤植や誤読と思われるものは注せずに訂正した。訓読には『長野県の地名』（日本歴史地名大系20，1979年，平凡社刊）を参考にした。なお，村名の用字は最も一般的と考えられる文字を使い，別字の注は加えなかった。また，村と新田の区別は一村ごとの確認が不十分のこともあって必ずしも決定版とはいえない。このため，前記諸本の村名の表記と一致しないものがあることをお断りしておく。
2. 村名欄の＊印は『旧高旧領取調帳』に収録されていない村名である。そのうち，（ ）を付したものは同書に社領として記載されていることを示す。
3. 村名欄の△印は譲渡広告に掲載されている村名である。なお，村名を（ ）で囲ったものは，上下または南北に分離独立している村名を右の広告文で便宜上，統一の村名として扱っているもので，照合のためそのまま表に加えたものである。
4. 史料区分の（ ）内に付したL，A，Mは整理用の文書記号として用いた30L，31A，31Mの記号を示す。本文書を利用する際に活用されたい。

いるかを示せるような、分布と数量とを組合せた表にすべきであるが、数量を確定できない現状では、とにかく一冊でも残っている村を確認したものである。村名は合計で一八三村となっているが（丸カッコの二村は除外）表の注記に記したように複数の出典を採用したことによる重複などがみられる。即ち、青柳村は後に金沢村と改めており、立沢新田は立沢村に統一でき、稗底村は村民が乙事村へ移動したため正保頃に廃村となり、湯之町は史料上には下諏訪町とあるものと合致し、百瀬村（松本藩領）のうち高島藩に分けられたものは南百瀬村を称している。このほか、鵜原村は譲渡広告のみに出てくる村名であって、他の文献類で確認がとれなかったので除外することにすれば、村名は一七七村となる。このうち、原形史料の残存するのは一〇四村、断載史料が七〇村、筆写史料が八五村となる。逆に、三種類のどの形態の史料も一切残っていないのが二六村（このうち新田村が十七）である。新田村は親村と合同して宗門帳を作成しているので、右の数字から残存率を算出しても余り意味はないが、今後の修復の過程で未発見の村（ことに新田）が出てくることも予想されるので、残存の村が増加する可能性はある。本文書の本体をなす宗門改人別帳が保管されていた高島藩の藩庫における全体量を推定できる資料がないので、現在の残存数量との比較はできないが、断載という特殊条件を考慮すればかなりの高率で残存したといえるのではあるまいか。藩庁の記録として保管されていた以上は、領内全域の各村を網羅していたと考えられ、それが「一括」して拂下げられたとすれば、例え断載されていても全村分が揃っていて当然という理屈ではあるが、藩庫での保存数量と拂下げ時における実在数量とが共に不明なので、これ以上の追求は無理である。拂下げ時の混乱による逸失や、その後の整理中に若干の亡失があつたことも想像に難くないので、これも考慮に入れておく必要がある。また、譲渡広告の別紙「十三」に史料の一部を分割売却したとあるが、これらの史料の追跡調査も今後の課題である。

全体量が不確定なため、各村ごとの残存数も算出できないが、これまでの結果を概数として掲げておこう。年代の

上限は寛文一一年、下限は明治三年である。この間に一冊のみという村もあるが、八四年分を確認し得る村が筆写史料にあった。断載史料の復原例でみると延宝九年、貞享五年、元禄一六年、明和四年、寛政一二年の各年は残存数が多いが（八例以上）、一応の傾向であって、原因などは不明である。

本文書の最大の特徴である断載の理由として、譲渡広告はその別紙の中で諏訪地方に特有の「ネコ捲り」（一種の差別待遇）という慣習を挙げ、宗門帳の記載を辿ることによってその慣習の不当性を立証し得ることを示唆している。別紙の「一」から「七」までに記された宗門帳をめぐる経緯は、僅か十余年の間に起ったことながら起伏に富んで、その展開は劇的でさえある。藤森栄一氏が本文書を素材として『小説 宗門帳』を執筆したのも一理あると思われる。<sup>(19)</sup>「ネコ捲り」の実体について、本文書のことと委しい矢崎源藏氏は「村祭などの村の行事の折に、会場に敷いたネコ（ゴザ）を巻いて後片付けをすることを義務づけられた家系」のことで、天保以後は「ネコ捲り」が増加するとともに、村役人への就任や分家を禁止するなど差別を強化したという。<sup>(20)</sup>そして、このような差別待遇が生じた起源を、今の寄留人扱と同じ様な「後住者に対する先住者の差別意識に基くものと推定している。矢崎氏以後にこの件にふれた論文や地方史はほぼ同趣旨の説明をしているが、本文書以外の一般用語としての解説記事は見出せなかった。<sup>(21)</sup>

「ネコ捲り」が伝えられるような差別だったとしても、これが断載の理由のすべてであったと理解し得るであろうか。確かに、不当な差別を受けていた農民にとつては、宗門帳を調査することで疑惑を解消することが可能であり、まして藩庫保存のいわば公文書であればその挙証力も高く評価されたことは疑いない。しかし、その差別が村内の慣行であっても、藩の行政に反映するものであるかは不明で、藩側が断載を強行した根拠とするには疑問が残る。第3図で示した切断の状態を一見すれば、この断載が証拠湮滅を目的としたことはほぼ間違いないだろう。とすれば、これらの宗門帳、ひいては「ネコ捲り」が高島藩にとって不都合でなければならぬはずである。もし「ネコ捲り」に



原因があつたとしても、それなら横内村の分だけを対象にすればよいのに、宗門帳全部を断載したのは、「ネコ捲り」が高島藩全域に及ぶ慣習であつたというのであろうか。まして、時代は明治に変わつていたのである。化政期以後の分は断載から除外されていたことも、この問題を解く重要な鍵となるであろう。もっとも、証拠を完全に湮滅しようとするなら、断載などの手間をかけずに直ちに焼却する方が確実で安全であるのに、敢えて断載して民間に拂下げたのは何故かという疑念もある。<sup>(2)</sup> 旧藩時代に行われた内偵を黙認したという伝承と合わせて、藩側が建て前と本音とを使ひわけて民間への情報流布を承知で拂下げたという仮説が成り立たないとはいえない。しかし、それにしては徹底した切断方法であつた。

## 三、

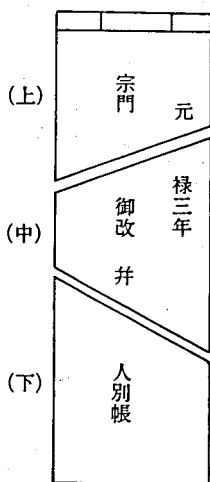
史料館が本文書を購入する時に、史料が正常な形態でなく断載されていることは、譲渡広告によつて事前に知つていたが、購入後にどう対処するかについての指針はなかつたようである。その当時、文書の購入に當つて部内で検討するような館内の制度は未整備であつたから、購入後の対応計画の有無は別段不自然ではなかつたが、保存状態が異状であつただけに何らかの事後対策が考慮されるべきではなかつたかと、今にして思ふぬではない。だが昭和三〇年頃は、史料の散逸状況に関する限り、第二次大戦直後の急激な変動こそ収束していたとはいへ、まだかなりの速度で散逸が進行していた。しかも、それを阻止するに足る保存利用機関の数も未だ極めて貧弱であつたから、受入れ後の対策を問うよりも、まず散逸を防止するために収集して保存を計ることが第一義とされたのは、ある意味で已むを得ない状況におかれていたことも事実である。その上、本文書の購入決裁が三年度にわたつて四回拂いとなつてい

とても明白なように、たとえその時に補修復原計画を立案したとしても、財政的に実現し得る可能性は殆ど絶望的ではなかったかと思う。一方では、史料の補修を始めとする保存に関する理論や技術も現今に比べれば十分とはいえず、適切な立案をもち得たか否かも疑問である。筆者自身、その当時にも立案の検討を付託されたとしても、恐らく返答に窮したろうというのが、正直な感想である。今日からみると、収集時に対策を講じないで、未補修のまま保存したことは、あながち悪い選択ではなかったといえると思ふ。特に、不適切な補修を強行して取り返しのつかぬ結果を生じて後悔する確率が決して低くないことを思えば、一層その感が深い。この点については、保存利用機関に限らずすべての史料補修に対して、同様に慎重な対応が求められるのであり、適切な処置が見出せない場合は、その状態で凍結しておくことの方が賢明な選択であることを改めて痛感する。とはいえ、収集後三〇年というのは、いかにも遅すぎたといえるのであって、着手の遅延がこれによって正当化できるとは考えていない。

もっとも、厳密に言えば、購入時の状態で凍結していたわけではない。補修計画はなかったものの、購入代金の支拂のためには受入目録を添付する必要がある、目録には断截状態のままであっても該当の村名ぐらゐは記載しておかなければならなかった。その際、原形史料と筆写史料とは通常の史料と同様に、表題・年代・村名・数量などを目録化すればよいわけで特に問題は認められない。断截史料の目録化はほとんど不可能なのであるが、ほぼ同形の目録を作る努力をしている。そのために、荒縄で縛ってあった結束を解き、村名と年号とを基準にして整理封筒に入れ、受入れ用の整理とした。しかし、この作業は中断し、断截史料の約三分の一は移送の状態のままで保存された。その後、散発的に来館する閲覧希望者に対しては、原形史料と筆写史料とを提供するにとどまり、断截史料は除外された。除外すること自体は、最終的な利用を計る復原のための措置として已むを得ないことであるが、復原の見通しが全くないところに後めたさが残った。<sup>(2)</sup>当面の利用を救済するための簡便な補修方法を考えたこともあったが妙案が浮ばない

まま立ち消えになった。その後、昭和四八年ごろに前掲の譲渡広告を発見した。これによって始めて史料館へ収集された状況が鮮明になると同時に、内容を一覽できる索引が前の所蔵者の手で作成されていたことを知った。それがあれば有力な手がかりを得られると思ひ、本文書の周辺の書棚を探したが、残念ながら引継がれていなかった。しかし、これが契機となつて、本文書に対する関心が強まり、まず史料の現状を確認しながら復原への方途を見出すべく細ぼそと作業を始めた。

最初は、受入れ時に同一村、同一年号を基準に整理封筒に入れてあるものを取り出して点検することから着手した。本来は一冊であつたものが幾片かに分割断截された状態は、前節の第3図に示した通りである。ここでは説明のために第4図のように(上)(中)(下)に三分割された史料を例に挙げる。(上)の部分は綴じ紐が残っているから丁序が乱れる恐れはない。しかし、(中)と(下)とは切り口で(中)または(下)であることは判明しても、前後の連続性を示す表記は全くない。時として(中)や(下)の部分の束をこよりで綴じたものがあつたが、これは前の所有者が整理の際に散乱を恐れて綴じたものと推測される。まず、(上)(中)(下)が完全に一致するものと、それぞれの丁数を数えてみると同一でないものが多い。そこ



第4図

で、(上)(中)(下)を一枚ずつめくって欠丁部分を確認する作業が必要になった。(中)と(下)の丁序を錯乱させないよう、注意深く作業を進めた。始めは、宗門帳という史料の性格上、表紙や前書部分のほかは人名と寺号の羅列であるから、文章による文字の続き工合で接合部を判断し得る余地が少ないことを懸念したが、実際に作業してみると、切断部の文字の続きには何

らかの手がかりが残っていることが多く、逆に文字が少ないだけに照合が簡単にすむ利点のあることに気づいた。例えば、接合部で両方にかかる文字が、寺号のうちの「寺」で斜に二分割されている場合には、紙の上下の寸法を合わせるだけで、殆ど瞬時に可否を決定することができた。こうして何冊かを点検した結果、第一に(Ⅱ)(Ⅲ)の枚数が一致しないものが多いこと、第二に(Ⅳ)や(Ⅴ)の束には時に乱丁があること、第三に整理封筒に仮詰めされているものは数年分を一括してあるなど便宜的なもので始めから作業をやり直す必要があること、の三点を得た。第一の、枚数が一致しないというのは欠損があるためであるが、欠損が束の上下——帳簿でいえば前部と後尾に多くみられるのは当然としても、時には束の中心部で一葉だけ失われている場合があり、断截作業の烈しさと事後の整理作業の困難さを思わせるものがあった。各冊の欠損状況は後掲の第二表を参照されたい。

右の試行によって、断截史料を復原するには、一冊ごとの丁序を揃えて欠損部分を調査していく点検作業を終えた後で、始めて補修作業が可能となることが判明した。<sup>(24)</sup> 今回の、六二年度の復原作業もこの二工程を平行して——実際には点検作業が少しづつ先行する必要があるわけだが——進めていった。

次には、断截史料の補修にどのような手法を用いるかの検討に入った。一般に史料の補修に際しては、1補修は最小限度の範囲にとどめる、2補修材料の吟味など補修による原史料の破壊を招かぬように注意する、3簡単に補修以前の状態に戻せるような可逆的な方法を用いる、というのが基本条件である。今回もこれを基本にしたのは勿論だが、あえて追加すれば頻繁な閲覧利用に十分に耐え得ることも考慮した。それは、本文書が横長帳簿であること、及び断截されているという特殊性に基く条件である。断截部の接合と補強とを考えれば、全面的な総裏打ちが先ず候補となるが、総裏打ちでは(Ⅱ)の部分に残っている綴じ紐を解かねばならず、しかも裏打ち後は紙の厚さが二倍に増加しているため元の綴じ紐では短かくて使えないし、全体量が倍加するの也不好ましくはない。これを避けるには、綴じ紐に手

を触れずに接合する以外に方法がない。補修技法のなかで、折り山などの脆弱部分を補強する「折り伏せ」の手法が応用できないかと考えた。切り口が曲線のものにも無理がなく、幅二ミリメートルほどの用紙なら重ねてもそれほど厚さにはならない。ただ難点は(上)と(中)とを接合する時に、綴じられている(上)の料紙が半分くらいしか開かないため、高度の技術を要することが予想された。それと、二ミリメートルの折り伏せ式で果して開披の強度が保てるかにも多少の不安があった。しかし、このほかの方法に比べれば、基本条件を最も満足させるものであることは明白であった。そこで、京都の宇佐美直八氏に趣旨を説明した上で、折り伏せを応用した補修の実験を依頼したところ、最小の折り伏せの用紙に最適の濃度の糊を使用して見事な出来栄への補修が返ってきた。<sup>(27)</sup>補修方法はこれで決定した。あとは、それをどのように実施するかの問題である。結論としては、予算経費と補修期間とを考え合せて、専門の高級技術者への委託でなく、学生アルバイトを導入して消化することになった。そのために、初心者にも簡単に作業でき、しかも史料の損傷防止にも配慮した補修のマニュアルを新しくする作定する必要がある。試行を重ねて到達したマニュアルは、失敗して再補修すれば史料を汚損する危険率が高くなるので、仕上りの美観はやや劣るが折り伏せの用紙幅を五ミリメートル程度として接合を容易にすること、始めは原史料を完全に広げられる(中)と(下)との接合から着手し、この接合片と(上)との接合には一枚の用紙でなく丁の表と裏とを別の用紙で貼り合わせるなどである。<sup>(28)</sup>最小限の補修を守るために、不用な補修紙は使わないことも確認した。例えば(上)と(下)があって(中)がない場合は、(中)の部分へ白紙を補わなければ(上)と(下)とを継ぐことができないから白紙を用いるが、(上)と(中)とがあって(下)がない場合は(下)の部分に白紙を補充せずに(中)で切れた状態のままとすることである。点検作業についても、欠損箇所には白紙を入れて、補修作業が円滑に進行するようにするなどの対策を用意した。

かくて、昭和六二年度に復原補修を完了した断截史料は二八七冊であった。その補修結果を用いて、断截史料の各

断片部分の欠損状況を示したのが第二表である。各部とも丸カッコ内が欠損枚数であり、○は一丁の一片を示す。？を付したのは裏表紙の欠落が本来なかったものか事故による欠損かが判定しにくいものである。従って、上中下の数字が一致するものは完全な揃いであり、(3)26(4)とあるのは表紙と初丁および後尾四丁が欠損していることを表している。欠損が帳簿の表裏を主としながらも、中心部でも断続的に生じている状況を具体的に理解していただけると思う。なお、これらの欠損が断截から整理までのどの段階で生じたかは到底明らかにできないが、前所有者が(1)(4)(7)各部の一番外側(表もあれば裏もある)に推定年代を墨書したことが、巻頭や巻尾の欠損が明治期の整理時においてすでに失われていたことを立証してくれる。第二表に掲出した二八七冊のうち欠損のない完成史料は六七冊で二二%に過ぎないが、欠損部分が裏表紙などの白紙の場所であるもの二八冊と、表紙や前書部分であって推定可能なため本文の解説には支障の及ばないもの三〇冊とを加えれば一二五冊となり、半数近くが十分に活用できることになる。今回は、完成度の良い史料から着手したので、今後の分にもこの比率が適合するかは確約しかねるが、一冊でも多くの完成史料の復原を望みたいと願うものである。そのためには、村名や年号の確認が困難な一枚ごとに分離してしまつた断片を、形状判定しながら接合する必要があるが、それを解決するためには図形電算の応用なども念頭におきながら、よりよい技法の案出に努力すべきであらう。そのほかにも将来の課題があり、さらに復原補修が完了した時点で解決すべき問題もある。本稿は本文書の特異な経歴と史料館への入手経過を明らかにしつつ、残存状況を含めて復原補修に着手した第一次報告とするものである。

第二表 断截史料の各部欠損状況調査

		(上)	(中)	(下)	その他
粟沢村	寛政 7	(タテ)	32	32	
"	明和 4	33	33	33	
"	寛政10	32	(2)26(4)	24(8)	
矢ヶ崎村	安永 6	36	36	(3)32(1)	
烏帽子新田	寛政 7	14	14	14	
文出村	寛文13	51	16(35)	12(?)9(?)	
"	延宝 9	61	60(1)	17(32)12	
"	貞享 4	49	(1)1(8)39	21(28)	
"	元禄13	43	43	42(1)	
"	" 15	45	45	29(16)	
"	" 16	51	29(22)	51	
"	宝永 7	43	(1)42	(1)42	
"	正徳 3	37		6(31)	
"	享保 3	45	(1)43(1)	45	
"	" 10	45	45	45	
"	寛保 2	52	(3)49	51(1)	
八手新田	寛文13	12	12	(1)11	
"	延宝 8	12	12	12	
"	貞享 4	12	10(2)	12	
"	" 5	11	10(1)	1(1)9	
"	元禄 2	11	11	11	
"	" 16	12	12	8(4)	
"	宝永 3	13	13	13	
"	享保 2	14	(1)13	14	
"	" 12	15	(3)11(0.5)0.5	15	
"	" 13	14	13(1)	14	
"	" 14	15	14(1)	14(1)	
"	寛保 2	18	18	17(1)	
"	延享 4	18	18	17(1)	
"	" 5	18	17(1)	18	
"	宝暦 5	19	19	19	
"	明和 5	20	(1)19	(1)19	
"	天明 2	19	19	(2)17	
"	" 8	20	(6)14	17(3)	
"	寛政元	22	22	22	
"	" 4	21	21	21	
"	" 8	22	15(1)5(1)	19(3)	

ハッ手新田	寛政12	24	23(1)	2(1)13(8)	
"	文化 6	31	(17)14	31	
塩沢村	延宝 9	19	18(1)	16(3)	
"	元禄13	26	25(1)	25(1)	
"	" 8	24	24	24	
"	" 16	(3)23	26	26	
"	宝永 6	24	24	16(8)	
"	享保 9	25	21(1)1(2)	25	
"	" 12	26	26	24(2)	
"	延享 4	24	(4)19(1)	23(1)	
"	宝暦 6	28	28	28	
"	" 8	24	23(1)	24	
"	寛政 2	33	(3)30	33	
"	" 7	31	31	25(6)	(中の下) (6)25
赤沼村	貞享 5	15	15	15	
"	宝永 4	15		14(1)	上の1部欠
"	" 7	16	16	16	
"	享保 2	16	16	16	
"	" 4	18	18	8(10)	
"	寛保 2	19	19	19	
"	宝暦 2	19	19	19	
"	" 10	22	22	21(1)	
"	明和 4	22	(1)21	6(1)15	
"	天明 8	23	(1)18(4)	19(4)	
"	寛政 2	23	23	23	
御射山神戸村はか	寛文13	35	(2)20(2)11	34(1)	
"	延宝 8	47	47	45(1)1	
"	貞享 2	42	38(1)2(1)	38(1)3	
"	元禄 2	42	42	41(1)	
"	正徳 6	59	59	58(1)	
"	寛保 2	59	59	(1)58	
"	延享 5	44	(22)22	(8)36	(下の二) (22)22
"	宝暦 6	46	(3)43	26(3)15(2)	
"	明和 4	60	60	44(1)15	
"	寛政 2	50(1)	(1)49(1)	(1)48(2)	
南大塩村	寛文13	52	52	50(2)	
"	延宝 9	48	(1)46(1)	47(1)	
"	貞享 3	53	53	53	



南大塩村	貞享 5	50	50	50	
"	元禄 8	62	62	62	
"	宝永 6	39	39	39	
"	明和 6	46	(6)40	43(3)	
"	寛政 3	47	47	47	
"	" 9	46	46	(1)45	
高部村	延宝 3	16	16	16	
"	貞享 5	19	19	18(1)	
"	元禄 4	21	21	20(1)	
"	享保 2	23	23	23	
"	寛保 2	25	25	25	
"	寛延 3	25	25	25	
"	明和 4	20	20	2(1)11(6)	
"	寛政 2	26	(1)22(3)	25(1)	
"	" 7	23	23	22(1)	
"	" 8	24	24	1(4)15(1)1(1)1	
田沢村ほか	貞享 3	21	(1)8(12)	20(1)	
"	" 4	19	(2)8(8)1	10(1)8	
"	元禄12	24	24	24	
"	享保 3	24(?)	(8)16(?)	23(1)(?)	
"	明和 5	38	(1)19(13)5	38	
"	天明 7	40	24(16)	(1)16(23)	
"	" 8	41.5	30.5	22.5(8)	
"	文化 6	23	23	(8)11(4)	
神戸村	延宝 8	33	11(22)	33	
"	元禄13	46	46	46	
"	" 16	41	41	41	
"	宝永 6	37	(11)26	37	
"	享保 3	40	40	29(11)	
"	寛延 3	58	58	58	
"	明和 3	48	48	28(5)14(1)	
中新田	延宝 3	37(?)	37(?)	8(29)(?)	
"	" 9	39	(1)36(2)	38(1)	
"	元禄 3	41	(1)32(8)	14(27)	
"	宝永 8	34	11(23)	34	
"	享保 2	36	36	33(3)	
"	" 4	35	34(1)	33(2)	
"	" 5	36	(1)35	(2)34	
"	" 13	(2)36	(9)29	(8)30	

中新田	元文 3	39	39	(1)38	
"	延享 4	42	42	27(1)13(1)	
"	" 5	39(?)	(1)38(?)	(11)26(2)(?)	
"	明和 5	44	42(2)	44	
"	安永 3	47	47	(4)43	
"	" 4	48	(29)18(1)	48	
"	寛政 7	55	13(2)38(2)	53(2)	
神宮寺村	延宝 9	36	26(10)	(5)8(23)	
"	貞享 2	30	30	(2)28	
"	" 5	37	37	(3)34	
"	元禄 2	37	37	32(5)	
"	享保 2	43	43	43	
"	" 3	46	46	46	
"	" 4	49	49	49	
"	安永 3	57	57	54(3)	
"	" 10	47(?)	47(?)	47(?)	
"	天明 8	56	56	52(4)	
南内田村	延宝 9	39	(1)37(1)	(3)1(4)7 (1)11(12)	
"	貞享 2	38	(2)36	19(19)	
"	" 5	44	38(6)	32(12)	
"	元禄 9	48	(4)44	(8)40	
"	享保 4	48	48	48	
"	宝暦 6	46	46	45(1)	
"	" 9	45	33(8)4	(40)2(3)	
"	寛政11	61	(10)51	61	
塩之目村	元禄13	30	30	30	
"	宝永 5	28	28	28	
"	享保12	29	29	22(7)	
"	宝暦 9	32	32	29(3)	
"	寛政 2	36	36	36	
"	" 12	34	34	25(9)	
"	文化 6	31	27(4)	31	
北大塩村	貞享 5	37	37	37	
"	元禄16	44	(1)43	44	
"	寛保 2	57	52(5)	57	
花場新田	元禄12	5.5	4(1)1	5(1)	
"	天明 2	10	10	10	

神代村	延宝 6	4.5	4(0.5)	4(0.5)	
"	寛政11	12	12	12	
上原村	元禄13	48	48	(1)47	
"	明和 4	60	(1)58(1)	5(7)18(1)29	
"	安永 3	56	55(1)	56	
粟沢村	宝暦 2	35	22(13)	35	
"	" 5	34	(8)23(3)	(2)24(18)	
"	寛政 2	34	(10)24	34	
"	" 8	33	(27)4(2)	33	(中の下) 13(20)
"	" 11	33	(5)28	33	
"	享和 2	32	(9)12(11)	(1)31	
田部村	宝暦 2	40	40	40	
"	明和 3	36	(19)17	36	
"	" 6	34	34	34	(上の一) (34)
堀新田	延宝 7	11	(1)10	11	
"	" 9	15	(3)1(1)10	6(9)	
"	貞享 5	17	17	17	
"	元禄 8	17	17	17	
"	宝暦 6	21	21	20(1)	
"	寛政 8	22	13(6)3	22	
"	" 11	21	21	(9)8(4)	
"	" 12	20	(1)19	1(5)4(3)7	
蔦木町	延享 4	39	(1)38	1(6)31(1)	
"	寛延 3	38	36(2)	26(12)	
"	宝暦 6	38	38	38	
"	明和 2	38	(1)37	(1)37	
"	寛政 7	39	39	39	
立沢村	寛文13	31	27(3)1	27(3)1	
"	貞享 3	40	(1)38(1)	39(1)	
"	享保14	51	41(10)	51	
"	寛政 4	66	62(4)	64(2)	
上蔦木町	寛文13	38	38	38	
"	延宝 3	40	40	13(27)	
"	天和 4	40	40	40	
"	貞享 2	38	21(17)	22(16)	
"	元禄 2	36	36	36	
"	" 3	36	36	36	
"	" 13	41	41	1(4)20(16)	

上葛木町	元禄16	40	(2)38	38(2)	
"	享保 2	48	48	(1)47	
"	" 9	43	43	43	
"	" 14	44	44	(15)25(4)	
"	明和 5	35	35	1(5)8(21)	
"	文政 9	42	(10)32	1(2)8(1)29(1)	
柏原村	寛文12	16	(4)12	16	
"	延宝 2	20	19(1)	19(1)	
"	" 3	19	(3)16	19	
"	" 9	19	19	19	
"	貞享 3	21	(3)17(1)	21	
"	" 5	22	22	22	
"	元禄 5	25	25	11(1)4(8)	
"	" 6	24	(3)4(17)	24	
"	" 8	21	21	21	
"	" 16	23	23	(1)22	
"	宝永 5	21(1)	20(2)	20(2)	
"	享保 3	28	27(1)	27(1)	
"	" 10	25	25	25	(中の下) (6)19
"	" 12	24	24	(7)17	
"	元文 4	23	16(7)	(17)5(1)	
"	延享 4	23	(2)21	22(1)	
"	寛延 2	23	23	18(5)	
"	宝暦 6	28	28	27(1)	
"	" 9	34	34	18(16)	
"	明和 3	31	14(1)13(3)	31	
"	" 4	31	(2)29	(15)16	
"	" 5	34	34	33(1)	
"	" 6	31	31	30(1)	
"	安永 4	31	(4)25(2)	28(3)	
"	天明 8	31	31	(1)15(7)4(4)	
"	寛政 3	29	(8)1(2)3(15)	(3)26	
"	" 8	31	31	31	
"	" 9	33	33	28(5)	
"	" 11	33(?)	(7)4(1)21(?)	33(?)	
"	" 12	32	32	29(3)	
埴原田村	延宝 7	26	22(4)	13(13)	
"	元禄 3	26		26	

芹ヶ沢村ほか	宝暦 4	68	(32)34(2)	(2)29(1)33(3)	
"	天明 8	14	(5)2(1)3(3)	11(3)	
"	寛政元	14	14	14	
"	" 2	9(3)1(1)	14	(1)8(5)	
"	" 8	14	13(1)	12(2)	
"	" 11	14	(1)5(8)	(3)4(7)	
"	" 12	13	13	6(7)	
須栗平新田	元禄 2	15	15	15	
"	" 8	16	(5)11	16	
"	" 16	15	15	15	
"	延享 4	15	15	15	
"	宝暦 9	16	12(4)	15(1)	
"	明和 6	17	17	3(12)2	
矢崎村	享保13	33	(3)30	27(1)2(3)	
"	寛保 2	34	34	34	
"	寛延 2	37	(6)31	36(1)	
"	明和 3	37	16(2)19	37	
"	" 4	38	38	31(1)5(1)	
"	" 6	38	30(8)	38	(中の下)38
神田村	寛文11	29	(1)28	(2)21(6)	
"	延宝 8	21	20(1)	(1)19(1)	
"	天和 4	25	25	10(15)	
"	貞享 5	22	(4)17(1)	(5)17	
"	元禄 3	30	30	1(17)12	
"	元禄 5	28	27(1)	27(1)	
"	" 15	29	29	21(8)	
"	宝永 3	26	(2)14(1)7(2)	(1)22(3)	
"	享保12	27	(6)16(5)	10(9)8	
"	" 14	25	(1)24	25	
"	寛延 3	22	8(14)	20(2)	
"	宝暦 6	23	23	(2)21	
"	" 9	24	19(5)	24	
"	寛政12	37(1)	38	(2)35(1)	
白姫村	寛文13	14	(2)12	13(1)	
"	天和 4	17	17	(3)13(1)	
"	元禄 3	16	15(1)	15(1)	
"	正徳 6	16	(1)14(1)	1(1)13(1)	
"	享保 2	18	(3)12(3)	16(1)1	
"	" 9	18	13(5)	16(2)	

白姫村	享保12	18	(10)7(1)	13(5)	
"	宝暦 6	15	(5)10	15	
"	明和 4	16	(9)7	(4)12	
"	天明 8	19	16(3)	1(5)11(2)	
"	寛政 7	18	17(1)	(1)4(13)	
"	" 11	16(1)	(6)10(1)	(4)12(1)	
上場沢新田	元禄 7	9	9	9	
"	元文 3	13	13	8(5)	
"	安永 4	16	(2)14	16	
湯之町	元禄 2	55	23(1)31	32(23)	
安国寺村	延宝 8	22	22	22	
高森村	" 9	17	17	17	
富辺村	貞享 4	10	9(1)	10	
"	天明 2	18	18	18	
北内田村	宝暦 9	63	63	61(1)1	
南内田村	寛政12	60	59(1)	(6)52(2)	
赤沼村	" 8	25	25	25	
"	" 12	25(?)	(13)8(4)(?)	25(?)	
神宮寺村	宝暦 3	49	49	48(1)	
塩沢村	貞享 5	23	23	23	
久保村	宝暦11	18	18	18	

- 。（タテ）とあるのは、横長の綴じ目にかけて二分割したもの。
- 。斜線のあるのは、欠損でなくて、二分割であることを示す。
- 。村名は史料の表紙の表記をそのまま採用したため、第一表の表記と一致しないものがある。

## 〔付記〕

史料館が国文学研究資料館への改組に伴う敷地内移動に際し、古い事務書類等の廃棄整理の渦中で発見した一通の譲渡広告が、断截史料の復原にかかわる端緒であった。その後、面倒な各部の欠損枚数を調べる点検作業を手伝ってくれた相京真澄さんと広瀬睦さんの両補佐員の仕事が後に予算化の手がかりとなった。六二年度の追加配分に至るまで予算の実現に努力して下さった管理部、とくに会計課の歴代担当者諸氏の尽力にも感謝したい。さらに予算配分後に多量の学生を動員してそれを指導した山田哲好氏およびこれを補佐した広瀬睦さん、そして慣れない困難な作業に従事した多数の学生諸君に深甚の謝意を表する。また、折り伏せの補修技術に関して快くご協力下さった上に貴重なご助言を賜った宇佐美直八氏にも厚くお礼を申し上げる。それ以前に、本文書入手の原点ともいえるべき譲渡広告の起草者である百瀬威氏が筆者の執拗な質問に快く応じられ多くのご教示をいただいたことにも心から謝意を表する。

最後に、全くの私事であるが、譲渡広告中にも出てくる中川善之助氏の末子相続に関する講演を昭和一九年の夏ごろに拝聴している。当時在籍した東北地方の某工業専門学校における課外の特別講演で、専門外の学生に対して丁寧な事例を引用しながらの講演を興味深くうかがったことを覚えていいる。恐らく諏訪地方の引例もあつたらうがそこまでは記憶していないものの、不思議な因縁を感じざるを得ない。

## 注

(1) 正確には、昭和三〇年度に全部を搬入したが、購入手続は三〇年度、三一年度(二回)、三二年度と三年度にわたり四回に分けて支拂われた。

(2) 寛文五年に提出された最初の宗門帳は堅帳であったが、同十一年から横帳となって固定した。但し、同六年より十年間における実施は定形による全域一斉ではなかったようである。第一回が堅帳、第二回以降は横帳といつてよからう。細川隼人「諏訪藩における宗門改」(『信濃』九卷七号、昭和

三三年)、金井圓「諏訪藩における初期の宗門改」(同前九卷一一号)、『諏訪の近世史』(諏訪教育会、昭和四一年刊)  
(3) これについては『史料館報』第四八号(昭和六三年三月発行)で概要を速報した。

(4) 本文はタイプ印書でザラ紙三枚に印刷され右端二カ所でホチキス止めされている。発信が昭和三一年になっているが、注(1)に記したように三〇年度の購入になっているので、遅くとも二月初旬以前に印刷したものと思われる。なお、「保存経過」として別紙に述べている拂下げにまつ

わる経緯は、故矢崎源蔵が小川三四郎からの聞取りをもとに「宗門帳物語(一)〜(六)」(『信州文壇』第四卷一号〜六号、信州文壇同人社、昭和一〇年一月〜六月刊)にまとめている(百瀬威氏示教)。矢崎氏は後に「諏訪地方の末子相続」(『信濃』第四卷一号、昭和二十七年)を発表している。

(5) 百瀬威氏の談によれば、全国的配付を目的に作成したものの、故有賀喜左衛門らの意見によって史料館への譲渡を優先して交渉を始め、最終的に史料館が購入を決めたため広告の必要を失い、発送されずに終わったという。

(6) 搬入時に本文書の受入れに関与した館員浅井潤子さんの話による。

(7) 個々の史料の表紙には「宗門御改并人別帳」と書いている例が多く、時に「宗旨御穿鑿人別帳」「宗門御改五人組人別帳」などの別名称が散見される。

(8) 立沢村矢沢氏に関する系譜の抜書である。何故これが作成されたか、それが本文書の中に残ったかは一切不明である。

(9) 高島藩が拂下げた時の破却奉行を、譲渡広告が中島坦左衛門としているのに対し、前掲「宗門帳物語」には岩本坦左衛門という異説を紹介している。

(10) 原形史料一八四冊のうち一七九冊が文化二年以降明治三年までのものである。残る五冊は、延宝四年、享保一〇年、明和九年、寛政六年、享和四年が各一冊である。この五冊

は、拂下げの混乱時に紛れて放出されたものと認められ、他の一七九冊とは区別して考えるべきものである。

(11) 前掲矢崎・細川両論文とともに、文化文政以後は時代が新しく生存者がいるため切られなかったとし、『諏訪の近世史』はそれを受けつぎながら生存者が多くなり、争いの種にもなるまいと、切らずにそのまま肩の中になげこまれた(二二六頁)として、それが紛争の原因にならないという見解を示している。

(12) 前掲細川論文と『諏訪の近世史』は一二台の押切りと数字を明示している。

(13) 本文書の全体総量については、本節後段および注(16)参照。

(14) 筆写史料の表紙に帳簿の図形を描いて欠損部を示した上で、残存部分だけを拾い写している。

(15) 筆写史料という分類では八冊を加えて七七五冊になるが、その八冊は特定の家の系譜を抜書きしたものであるので、宗門帳の筆写としては七六四冊という意味である。注(8)参照。

(16) 前掲『諏訪の近世史』には、一六〇カ村の二万五千冊余を処分したとあり、拂下げられたうちの半分は屑となって売却されたという(二二六頁)。これが正確とすれば一万二千冊は残ることになるが筆者の予測現存数はその三割程度にしかない。前所有者による売却分を加算しても両



者の差は大きく、今後さらに追求する必要がある。

- (17) 前注(16)に記したように『諏訪の近世史』は一六〇村としてゐるが、その根拠は不明である。

- (18) 拂下げの半分は、接合不能で屑として売却されたともいわれる。注(16)参照。

- (19) 昭和四四年、学生社刊。本書の存在については森安彦氏のご教示を受けた。なお、著者藤森氏は本文書にまつわる経緯を伝聞して著述されたようで、実際に本文書を見ることになかったため、断載形態の描写などは実体と違っている。

- (20) 前掲「宗門帳物語」(一)。

- (21) 前掲細川論文および『諏訪の近世史』など。

- (22) 断載以前の方策として、諏訪湖へ沈めるか手長山で焼却するか計画があったが、いずれも中止となつて、断載後に紙屑として拂下げることに決定したものである。しかし、計画を中止して断載に変更した理由は、うまいかずとのみでそれ以上には触れていない。(前掲「宗門帳物語」)
- (23) 購入直後に二冊だけ補修を試みた形跡があるが、継続する展望はなかった。なお、この補修は一枚の間紙に表裏両面を糊づけするという、簡便すぎてやや乱暴な方法によつてゐる。

- (24) 点検作業が済んでいれば、いつでも補修にかかれるわけなので、補修の見通しがないまま、まず点検作業を始めた。

試行の後で主に作業をしてくれたのは史料館の事務補佐員相京真澄さんと同広瀬睦さんであった。

- (25) 拙稿「史料の保存と補修」(史料館編『史料の整理と管理』昭和六三年、岩波書店刊)一一九―一二一頁参照。

- (26) 例えば、幅三〇五センチメートル位の紙テープを各丁の内側に入れて点々と貼り合せる方法は、紙幅や本数をふやしても仕上がりが不安定で史料を破損する危険が大きいと判断してやめた。補修を見送つて、点検を終えた史料を一丁分ずつ並べて写真複製して利用に供する案も出たが、原史料を保存する視角が弱いのが難点であった。

- (27) 宇佐美国宝修理所長であり、宇佐美松鶴堂の八代目当主でもある宇佐美氏とその工房の方に大変お世話になった。仕上りは継ぎ合わせたものとは見えないほど精巧なものであった。

- (28) この検討には、山田哲好氏と広瀬睦さんの協力を得ている。両氏は、その後の補修実施中に頭在化した諸問題を解決するために各種の処法を案出しているが、その詳細を述べるのは筆者の埒外にある。

〔追記〕本稿脱稿後の一九八九年二月二八日に、本館評議員坪井清足氏がNHK教育テレビのテレビコラムで「裁断された宗門帳」と題して本文書について放送された。

